



Title	近世日本のニワトリ利用に関する動物考古学的研究 [全文の要約]
Author(s)	許, 開軒
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15979号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92252
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Kaihsuan_Hsu_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 許 開 軒

学位論文題名

近世日本のニワトリ利用に関する動物考古学的研究

本論文では、近世日本におけるニワトリの利用の時間的変遷と空間的異同を解明し、ニワトリ利用が日本で普及した過程を明らかにすることを目的とした。そのために、近世の遺跡出土鳥類遺体の組織学的・形態学的分析を通して、ニワトリの利用頻度、年齢と性比、利用方法、およびニワトリの形態の観点から時間的変遷と空間的異同について検討した。分析資料は江戸、大坂、長崎の武家地、町人地および外国人居住地から出土した鳥類遺体である。また、これまで鳥類の出土が報告された遺跡の事例とも比較検討した。

本論文は7章で構成された。第1章では、現在のニワトリ利用およびニワトリの起源と拡散について概観した。また、日本におけるニワトリ利用の研究史と近世のニワトリ利用に関する研究の現状と課題について述べた。

第2章では、キジ科遺体の形態学的同定基準の作成と適用の成果を述べた。キジ、ヤマドリ、飼育下および野生のセキショクヤケイ、様々な品種のニワトリの長骨の形態を観察・比較し、非計測形質によるキジ科遺体の同定基準作成を試みた。その結果、キジ科の鳥口骨、尺骨、橈骨でニワトリとキジ・ヤマドリの識別に役立つ非計測形質を検出した。また、ニワトリの鳥口骨、尺骨、橈骨の最大長および骨端幅は変異が大きく、キジ・ヤマドリの標本と計測値の範囲が顕著に重なることが分かった。さらに、出島和蘭商館跡から出土したキジ科資料を再検討したところ、尺骨と橈骨における非計測形質と計測値を組み合わせた検討はニワトリとキジ・ヤマドリの識別に有効と考えられた。

第3章では、市谷本村町遺跡および四谷一丁目遺跡における分析結果を示し、江戸におけるニワトリの利用について考察した。市谷本村町遺跡では、19世紀以降ニワトリの利用が増加し、単一遺構からニワトリが大量に検出された事例が確認された。また、成長段階と性比に着目すると、幼鳥・若鳥が少なく、雄が雌より多い傾向が確認された。四谷一丁目遺跡では、ニワトリは17世紀から多く利用されていたが、18世紀には減少し、19世紀に再び増加した。また、市谷本村町遺跡と同様に、19世紀に単一遺構からニワトリが大量に検出された例が認められた。雄が雌より多いことは市谷本村町遺跡と共通していた一方、幼鳥・若鳥の割合は市谷本村町より高く、通時的に一定程度利用されたことが考えられた。また、これまで鳥の出土例が報告された江戸の遺跡を対象にニワトリ利用の時期的変遷を調べた結果、全体的に18世紀から19世紀にかけてニワトリの利用が増加した傾向がみられた。また、単一遺構から大量のニワトリが検出される事例は19世紀でのみ2例が確認された。さらに、利用の対象となったニワトリは雄と成鳥が多い傾向が認められた。市谷本村町遺跡と四谷一丁目遺跡におけるニワトリ利用の特徴は江戸全体の傾向と調和的なものと考えられた。

第4章では、出島和蘭商館跡と魚の町遺跡における分析結果を示し、長崎におけるニワトリの利用について考察した。出島和蘭商館跡と魚の町遺跡では、17世紀から19世紀までニワトリはもともと多く利用された鳥類と考えられた。両遺跡では幼鳥・若鳥と産卵期の雌鶏が比較的高頻度で利用された一方、足根中足骨からみた性比では雌鶏が雄鶏より多い傾向があった。17世紀とそれ以降では、幼鳥・若鳥は減少し、産卵期の雌鶏の割合は増減する時期差があった。近世の間にニワトリの供給パターンが変化した可能性がある。その他の長崎市内の遺跡におけるニワトリの出土例を調べた結果、唐人屋敷跡における利用対象の年齢・性比の選択などのニワトリ利用パターンは出島和蘭商館跡と類似していたことがわかった。長崎の町人地と外国人居住地では、17世紀から日常的に

ニワトリを利用し、若鳥と雌鶏も頻繁に利用していたと考えられた。

第5章では、大坂城下町跡 0J04-1 地点における分析結果を示し、大坂におけるニワトリの利用について考察した。大坂城下町跡 0J04-1 地点ではニワトリは17世紀中頃の時点ではすでに主に利用されていた鳥類であった。また、雄鶏の成鳥が多く、幼鳥・若鳥と雌鶏は含まれるが比較的少ない傾向があった。その他の大坂の遺跡におけるニワトリの出土例を調べた結果、大坂城下町跡の各地点では出土鳥類の点数が少ないが、17世紀初頭からニワトリは利用されていたことがわかった。一方で、武家屋敷に帰属した遺跡では、遺跡によってニワトリの利用が低調であったところがあるほか、ニワトリが多く検出された遺跡ではニワトリの利用は19世紀以降増加した傾向がみられた。大坂城下町跡 0J04-1 地点と同様、その他の遺跡・地点においても雄鶏が多い傾向が認められ、江戸時代の大阪では利用対象となったニワトリは雄鶏の成鳥が中心であった可能性が考えられた。

第6章では、第3章から第5章で扱った各遺跡におけるニワトリの形態に着目し、その時間的変化と地域間の異同を明らかにすることを試みた。各遺跡において17世紀から19世紀にわたって現在のチャボに相当する小型の個体が利用された。また、17世紀の市谷本村町遺跡および18世紀の魚の町遺跡以外の各年代の各遺跡においてシャモに相当する大型の個体が利用されたことが明らかになった。利用されたニワトリの体サイズの時間的な変化に関して、19世紀になると四谷一丁目遺跡では有意に小さくなり、魚の町遺跡では有意に大きくなったことが確認された。一方で、市谷本村町遺跡および出島和蘭商館跡ではニワトリの体サイズの時間的変化は認められなかった。各年代の遺跡間で比較すると、17世紀の大坂城下町跡と四谷一丁目遺跡で利用されたニワトリは比較的大型であったと考えられる。一方で、18世紀に魚の町遺跡のニワトリはほかの遺跡より細い傾向が見られた。また、17世紀から19世紀まで市谷本村町遺跡のニワトリは出島和蘭商館跡のものより体長の割に細い傾向がみられた。これまで報告された江戸の各屋敷地においても17世紀から多くの遺跡でシャモに相当する大型ニワトリが利用されていたと考えられた。文献史上の知見によれば「シャモ」や「チャボ」などの品種は江戸時代初期にすでに存在した。本章の成果から、「シャモ」や「チャボ」の可能性のある大型および小型のニワトリ品種は17世紀初頭にはすでに普及していたことが考えられた。一方で、江戸時代を通じて一般的に利用されたものは「小国」を元に作り出された諸品種と同程度の大きさを持つニワトリであった可能性が高い。

第7章では、第3章から第6章の成果を踏まえ、ニワトリの利用頻度、年齢と性比、利用方法および形態の観点から、近世日本におけるニワトリ利用について時間的変遷と地域間の異同について考察した。江戸、長崎、大坂の3都市で比較すると、江戸では19世紀になるまでニワトリを多く利用した屋敷地が少なかったのに対して、長崎では江戸時代を通じて、遺跡の帰属を問わずニワトリは主に利用された鳥類であった。一方で、大坂では町人地のほうが武家地より早い年代からニワトリを多く利用としていた可能性が考えられた。ニワトリの利用が盛んになった時期が遺跡によって異なり、居住者の属性や地域性に関連する可能性があることがわかった。また、長崎では、大坂や江戸と比べ、より多くのニワトリの幼鳥・若鳥および雌鶏が食用となっていたと考えられた。各遺跡、地域では利用対象となるニワトリへの選択傾向が異なった。さらに、ニワトリの持ち込まれ方および調理方法は遺跡によって異なると考えられた。

また、中世以前と近代以降の日本におけるニワトリの利用と比較することで、日本におけるニワトリ利用の普及過程を明確にすることを試みた。中世までニワトリの出土例は少なく、ほとんどの地域では中世末までニワトリの食用が一般的ではなかったと考えられた。歴史学的知見によると、ニワトリの食用は17世紀初頭には一般的ではなかったが、18世紀以降に食用としての需要が高まったとされてきた。そして、19世紀後半になるとニワトリを食べる習慣が一般的になったと考えられてきた。一方で、長崎では18世紀からニワトリが一般に食用とされていた記録がある。本論文の成果である江戸のうち19世紀にニワトリの検出率が高い遺跡が多いこと、および長崎において17世紀からニワトリを頻繁に利用していたことはこれまで提示された歴史学的知見と一致している。一方で、大坂城下町跡では17世紀にニワトリが多く利用されていたことから、近世においてニワトリの利用頻度の傾向は都市によって異なることが明らかになっている。また、その他の地域の鳥類の出土傾向から、ニワトリの利用が幕末の時点で普及していたことは、多くの地域で共通していた可能性が考えられた。近代になると、鳥類の出土例は稀であるものの、19世紀後半のニワトリの検出頻度が高い傾向はその後も続き、近代以降鳥類の利用はさらにニワトリに偏ることになったと考えられた。

最後に、近世日本におけるニワトリの利用に関して、科学分析手法の利用、発生学やタフォノミ

一からのアプローチ、遺跡内の空間別の検討、およびこれまで未報告だった資料の再検討と出土資料の年代の精査を今後の課題として提示した。